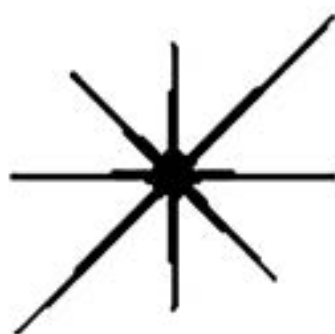


コメット通信 65

['25 年 12 月号特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

偶成記

——夕暮れまでの喫茶店（5）

中村邦生

連想、またはそぞろの息づかい

ユートピアに抗して

「偶成記」、読みましたよ、と旧友の M から電話があった。挨拶もしないうちに本題を話し出すところは、若いときと変らない。

——神田神保町の〈李白〉のエピソードは懐かしかったな、よく思い出したね。それでさ、あの喫茶店の名前だけど、誤解している可能性もあるんじゃないかな。ぼくを含めて誰もが唐の詩人の李白から取った店名と思い込んでいたけど、李朝白磁の李と白だったみたいだよ。確かなことは判らないけど、三省堂書店の古参の店員さんから伝え聞いた人がいるのさ。

李朝白磁って、朝鮮王朝の時代に作られた白磁器のことかい？

——そうだよ、あの店の民芸調の雰囲気合うよね。白磁の壺か何か飾ってあったかもしれない。それでさ、あなたが書いていた編集者らしき人物の話だけど、わざと李白の詩集を持参したりして、帰り際に嫌味な振る舞いに出たよね。でも、そもそも誤解があったとなれば、準備してきた皮肉な一言も空振りに終わっていたはずだし、店主にとってはダメージでも何でもなくて、むしろその客の陶磁器への無知に呆れて、侮蔑のゆえに、ただ無視しただけなのかもしれないね。だから、心理的な別の逆転ドラマも考えられるということかな。そう、あなたが書いたエピソードとは異なる人物像が浮かび上がるサイドストーリーっていうか、一つの事実だけに依存しない話の可能性があるわけで、そこがとても愉快じゃないか。

じゃ、店名を〈モーツァルト〉に変えてしまったのは、どういうわけ？

——なぜだろうね。もしかしたら、乳白色の素朴で優雅な白磁の美に何かしらつながるんじゃないかな。無垢でありながら深みも感じられる美しさがあって。でも、本当の理由は判らないよ。とにかく楽しく拝読させてもらいました。そう、大地に身体を挿し込んだ疑似セックスの話も面白かった。

いや、疑似セックスじゃないよ、大地を相手にした本当の性体験だったからね。

——はい、はい、そうでしたね。失礼いたしました。ところでさ、石神井公園の〈可否茶房〉は今でも行くの？

いや、このところ行ってないけど、どうして？

——前に変な言い方していたよね、あまり行きたくないけど、妙に癖になって出かけてしまう店だって。コーヒー豆の分類の説明が細か過ぎるって、ほめるような文句をつけるような感想も口にしていただろう。きのう蔵前橋の近くで、あれこれ何かと強いこだわりを持つ店を見つけたものだから、それでふと思い出したんだ。

〈可否茶房〉のこと、そんな言い方をしたか？ 覚えてないけど、じゃ、久しぶりに行ってみるかな。

師走の最初の日曜日、〈可否茶房〉に出かけた。大通りから外れた古いビルの奥にあり、南隅の席

を選べば窓から石神井池のボート乗り場が見えるのだが、一人客はいつもカウンター席へ案内される。ソファも椅子も深紅のビロード調の布地で、昭和の老舗の雰囲気を残している。照明を落とした薄暗い室内で、読書にも書きものにも向く喫茶店ではない。それでも本とノートはリュックに詰めてきた。石神井公園の近くに住んでいた黒田三郎の詩集、ジョルジュ・ペレック『考える／分類する——日常生活の社会学』。それと、『図書新聞』の年末読書アンケートで挙げた小池昌代『Cloud on the 空き家』。回答の結びは以下のような文面になった。

ユーモアをおびた軽妙な語りが、二章あたりから驚きの展開となり、徐々に虚実の時空が軋む。詩的閃きの点描も魅力的な一書だ。

自ら記した文でありながら、改めて思い起こしたとき、「徐々に虚実の時空が軋む」というフレーズが、何やら脳髓に酔気の心地を呼び、私は睡魔を払うように背を伸ばして息を整えた。

〈可否茶房〉は、訪れるたびににもはや二度と来ないだろうと思うのだが、数年に一度はふらりと立ち寄る。理由は、コーヒーのメニューが豊富で味も確かだからだ。店主の年齢は七〇代半ばくらいだろう。他の客との雑談から察してのことだ。開通した直後の東海道新幹線に中学生2年のときに乗ったという。

コーヒーカップは九谷焼で揃えているので扱いに気を遣う。生豆の選別、天日干し、焙煎までの作業を一貫してこなすこだわりの店だ。「新入荷」と分類されたメニューから、「厳選優良豆、特選品」と明記してあるホンジェラスを注文した。「まろやかな甘み」が楽しめるという。「ロス・リモス農園」と栽培地も紹介してある。一品ごとの特質の詳しい差別化にはことのほか感心する。客がコーヒー豆への余計な蘊蓄を挟む余地はない。確かにおいしいし、ただ黙って味わうだけだ。しかし、私の鈍い味覚はいつも愛飲しているグアテマラと区別できない。

カウンターの椅子は10脚ほどあるが、ほぼ満席だった。この席の特徴は、ほぼいつも常連客で占められていることで、めいめい店主との会話を楽しんでいる。私はひとり気楽によそ者感、今の言葉で言えばアウェー感に浸りながらノートを取り出し、メニューの「オーガニック・コーヒー」に区分けされた銘柄名を写し始めた。

コロンビア、ヒロカサカ農園、やわらかいバランスの取れた味／ガテマラ、サンラファニエル農園、すっきりした甘み、カップ・オブ・エクセレンス入賞／ブラジル、イビボラ農園、やわらかな苦み……

と、ここまで書いたとき、店主がノートを覗き込みながら言った。

「ずいぶん細かく書いていますが、ネットでご紹介でも？」

「いや、ぜんぜん違う場所ですけど、まだ決めていません」

「どこかに載せるのでしたら、値段は書かないでくださいよ。その点は、よろしくお願いします」

店主の表情は柔和だが、口調は硬かった。居心地が悪くなった拍子に、ミックスサンドを追加注文した。私の場合、ふだん喫茶店で食事をとることはない。しかしパンを頼んだとき、日本の自家焙煎コーヒー史のあるカリスマ的人物が述べたという名言が思い浮かんだ。「ケーキとコーヒーは恋人関係、パンとコーヒーは夫婦関係」なのだ。この言い方に従うと、私は珍しく「夫婦関係」を選んだことになるだろう。「恋人関係」ならば、この店のチーズケーキはコーヒーとの相性がとてもよい。

薄暗い照明が気になり、この店に長居するつもりもなかったが、「分類」という行為をめぐる連想が動き出したので、しばし記憶を辿った。ジョルジュ・ペレックの本を出がけに用意してきたのも、

そうした思いの揺れる予感があったからだ。

「分類」の話となれば、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの述べた有名な話がある。フランツ・クーン博士と称する人物の所持していた中国の百科事典には、14に区分された動物が記載されている。「皇帝に属するもの」「飼いなされたもの」「乳のみ豚」「人魚」……「いましがた壺をこわしたもの」「遠くから蠅のように見えるもの」など、原則や基準が不可解な分類法だ。これがさらに知られるようになったのは、周知のとおりミシェル・フーコーが『言葉と物』の序文で取り上げてからである。私たちが当然のように受け入れている知の秩序の脆弱性を論ずる導入例としてであった。

しかし私がペレックの遺作を開いて、まず目に入ったのは「ユートピア」と小見出しのある一文だった。

すべてのユートピアには、偶然や異物や《雑物》の入る余地がないため、人を意気消沈させるものがある。そこにおいては、すべては秩序立っており、秩序が支配している。

すべてのユートピアの背後には、つねに、大きな分類図があり、一つの場所がそれぞれのものにあり、すべてのものにはそれぞれの場所がある。

(『考える／分類する——日常生活の社会学』、阪上脩訳)

すべてが過不足なく整い、「大きな分類図」によってそれぞれのものは適切な場所を得て、無駄なく秩序立てられ、不純物、夾雑物、紛れ物がつけ入る隙などない充足空間こそユートピアだとすれば、「人を意気消沈させる」という事態は容易に理解できる。無駄や余剰が排除されている場など、管理と抑圧のディストピアでしかない。もちろん、そのような現実など、ユートピアの本義のとおり「どこにもないところ (nowhere)」に過ぎず、この先の思念は行き止まりになるばかりであるが、秩序の支配する「分類」に対比するものとして、ペレックが清少納言に言及していることは面白い。

清少納言は分類しない。彼女は列挙し、ふたたび始める。ひとつのテーマが、簡単な記述または逸話のリストをつくり出す。ずっと先で、ほとんど同じテーマが、もうひとつ別のリストをつくり出し、そうやって続いていく。

(同上)

『枕草子』は、類想（ものつくし）、回想（思い出）、随想（感想）と構成を類別することができるが、「春は」、「山は」、「虫は」、「はしたなきもの」といったようにテーマを立て、その内容の記述において、自在な発想で体験的な出来事や感懷を連ねていくことに特徴がある。「分類」ではなく、列挙と並列のディスクールなのであり、そうであればこそ反ユートピアの言説空間と言えようか。

今私が求めているのは、秩序と体系からなる「分類」ではなく、こうした「列挙し、ふたたび始める」という止むことのない並列のそぞろの想念だ。取り留めなく、思いつきのままに記憶の脇道に入り込んだり、幻影に見とれて我を忘れたり、好奇心のまま自己撞着の迷路を厭わず進んだりするようなものだ。意想外の五感の振幅を呼び、心身のこわばりを解く思考である。とりもなおさず、それは連想の力と同義のものであろう。連想こそ日常的な意識・無意識を動かす潜勢力となる。

池畔をめぐりながら

石神井公園の水辺のベンチに座り、どれほどの時を過ごしたのか。日没の刻にはまだ間があった。

店を抜け出て池畔に着いたとき、息が整うような安堵感を覚えたのだが、その気分の正体は判然としない。池面の落ち葉が微風の立てる波紋とともに、ゆるやかに水門に向かって動いていく。落ち葉の静かな流れとて、集合と離散を繰り返している。

「分類」をめぐる想念もまた、消えることなく小さな渦を作っては移りゆく。秩序と体系にそった仕分けは、いつだって厳密なものになりようがないし、あえてそれを強いるならば、はみ出しや逸脱のいわば「間の遊び」^{あいすさ}ごとき貴いものが切り落とされ、整序され、図表化や数値化にいたる。

しかしながら、奔放気ままな連想であっても、その動きを辿っていけば、自覚を越えたところで図らずも思念同士が連携し、グループを成し、おのずと「分類」に似た姿を持つこともあるだろう。言うまでもなく、一つの連想が孤立しているわけではない。むしろ連想は互いに共鳴することが宿命づけられているとさえ言える。だからこそ、グループ化した連想と連想が驚きの結託をして、新たな動きに向かうことがあるのだ。むしろそれを待っていることすらあるかもしれない。

池を隔てた木立の奥にある野外ステージあたりから、バイオリンの練習の音が流れてきた。少し前までは、フルートが難所にさしかかった旋律を繰り返していた。バイオリンの練習者は、バッハのメヌエット3番を弾いている。メヌエットだからリズムも3拍子だ。

ふいに連想がステップを踏む感じになり、3という数字が気になり出した。列挙のプロセスで「分類」のきっかけになるとすれば、3というセットが成り立ったときだ。3は調和と安定性を含意する象徴だ。すると列挙の動きが3つにまとまると、連想も一息つく感じで、終わりになるのではないか。なるほどそうかもしれないが、私の場合、むしろ3つの想念の協働によってこそ、あらたに記憶の編成を呼び込み、物語風な意識の流れへ進んでいくことが多い気がする。今具体例を思い出すべきなのであろうが、思念が空回りしている。気分を変えるために池の周りを歩くことにした。

ある日ふと／自分の行くべきところが／どこにもないことを／見出す／そんな／馬鹿なこと
とって／あるものか／石神井公園の木影に立って／ぼんやり僕は考える／霧雨は止まず／池の廻
りに人影もない／……
(黒田三郎「ひとりの個人」)

歩き始めたとき、詩句を思い浮かべ、いっばしの彷徨い^{さまよ}人の心情になるのは、我ながら滑稽だ。まさか二十歳の若者でもあるまいし。

ジーンズ姿の中年の男が弾くバッハのメヌエットに近づき、ふたたび遠ざかった。

三対から始まって

家に帰り着いてからのことだが、3という数字についてのナボコフの発言を思い出した。

ウラジーミル・ナボコフは、コーネル大学でカフカの『変身』を講義するにあたって、作中に頻出する3という数字の重要な役割を指摘している。ただし、象徴的な意味においてではなく、3行連句、3和音、3枚続きの絵画などと同じく三幅対(トリプティック)としての美的論理性のためである(『ナボコフの文学講義』、野島秀勝訳)。

なるほどナボコフの指摘どおり『変身』は3部からなり、グレゴールの部屋のドアは3つだし、相手にする家族は父母と妹の3人、登場する召使は3人、下宿人も3人、家族は3通の手紙を書く。それゆえに、「カフカの幻想はすぐれて論理的なものであることを見取らなければならない」とナボコフは強調している。

『変身』の読解は措くとして、3という数に「偶成」のトピックを重ねた場合、どうなるか。三対が論理的な整合性と安定感を持つことは明かだ。しかし3つからなる組み合わせは、本当に秩序立った均衡を保証するものだろうか。いや、保証するとしても、遊戯的な発想の飛躍やレトリカルな思考を閉塞させてしまう。むしろ三対の組み合わせが破調と違和を内包するものであってこそ、想念が閉じることなく新たな展開に向かうはずなのだ。安定、均衡、秩序を揺るがし、親和性を欠いた三対の遭遇こそ、感応の振幅を広げるにちがいない。ときに不穏な三つ巴の纏れた関係が引き起こす、偶発的な相乗効果も期待できる。それでこそ、連想の列挙が続いていく。

いささか迂遠な言い方をしているが、とりたてて大仰な出来事を前提にしているわけではない。あっけないほど身近なものである。例えば、新聞を読みながら、自ずと記事が3つほどセット化されて、それらの集合が遠い記憶の情景を呼び出すことがある。もちろん、紅茶に浸したマドレーヌ菓子のように、単独のものだけで記憶のインデックスになることは普通であるが、私自身の経験に限定したことに過ぎないとはいえ、三つ巴は連想の力を生み出すので、いつでも歓迎したい気持ちだ。

今朝、『朝日新聞』を読んでいるとき、三対の列挙に関わる小さな出来事があった。「今日の一言」欄に、〈今日の「想像力」が明日を「創造」する〉というアフォリズムらしき言葉が目に入ってしまったのだ。私も好きな曲がたくさんある某シンガー・ソングライターの言葉である。素晴らしいことを想像すれば、そこから未来は始まっているという主意のコメント付きだ。しかもカラー刷りでひととき大きな活字である。私はこの堂々たる凡庸な言い回しに気分が落ち着かなくなった。韻を踏ませているところも凡手だ。もちろん、こうした素朴過ぎる言葉に励まされる人もいるかもしれない。蕎麦屋の壁に掛かっている格言カレンダーで元気を回復した人を私も知っている。

この名歌手には不本意なことを述べたかもしれない。しかし大事なことはこの先にある。この「一言」の口直しをしたい気分が働いて、つまりはこの言葉が見事な起点となって、これに並列させる他の記事に強い関心が向かった。負のエネルギーはいつでも有難いのだ。

まず、愛知県の動物園で起こったチンパンジーの事件だ。一匹の雄のチンパンジーが、1歳半を過ぎても群れに入れないまま過ごしていた。生後すぐ母親の育児放棄に遭っていたのである。出産の痛みで母親が恐怖にかられ、子どもを危険な存在と思い込んでしまうことがあるという。普通ならば母から教わる挨拶や感情表現など、群れのルールを知らないまま、仲間に入れずに空っぽの麻袋を抱きしめて過ごしていた。ところが、あるとき転機が訪れる。少し年長の雄のチンパンジーがこの見放された子猿に関心を示し、じゃれあうような、からかうような行動を始めたのだ。その遊びが仲間との関係性も変えていく。いつしかこの兄貴分のチンパンジーの母親ともども、並んでくつろぐようになった。

次に気になった記事は、現代美術家の山口晃による東京・日本橋をめぐる「現場思考」の話だ。橋の上を覆う首都高速道路は、造った当時から景観破壊の典型として評判の悪いものだが、その見方に異議を唱えている。周囲との違和感を指摘するなら、そもそも江戸情緒の残る木造瓦屋根の商家街と西洋石造りの日本橋の取り合わせは「不調和の先達」だった。それを肯定するならば、今の日本橋と首都高の組み合わせは歴史的景観として「似たもの同士」ではないかと。まことに興味深い論議で、いずれ稿を改めて考えてみたいが、それよりも私はこの日本橋の記事から連想が飛躍して、杉並区久我山の玉川上水の兵庫橋の記憶を引き寄せたのである。それこそ私にとっての「歴史的景観」に他ならない。実は先のチンパンジーの「育児放棄」の話にも重なるのである。

凡庸と感じた「格言」が発端となって、「育児放棄」、「兵庫橋」と三対からなる連想がにわかに追懐の気分を帯びて、遠い昔のドザエモン（溺死体）見物のエピソードを呼び起こしたのだ。

先の箴言が連想の起点を作ったとなれば、〈「今日の「想像力」が明日を「創造」する〉という文言も何やら大切なメッセージに変貌してくるよう感じられるのだから、ひと時の認識の在りようは当てにならない。新聞記事を追いながら、妙に気分のざわつきを経験し、私自身の好き勝手な視線の移動がとらえた偶発的な結びつきに過ぎない。これは分類の知の見極めから生まれたものではなく、きまぐれな列挙の動きから生じた想念だ。

ドザエモンを見にいく

この話を記そうとすれば、いったん小休止の溜息をもらしたくなる。

玉川上水は流れが速く水量も多い危険な川だった。中は深くえぐられていて落ちて助かった者は誰一人いないと言われた。それだけに投身自殺も多く、太宰治が愛人と身を投げたのも玉川上水だ。

1950年代の終り頃（昭和30年代半ば近く）、場所は東京の杉並区久我山。その玉川上水にかかる兵庫橋という名が少年たちの間で秘密めいた響きを持っていたのは、橋から上流に向かって50メートル先に、堰堤とも川簀えんてい かわすがきとも呼ぶが、流れてきた屑物が引っかかる柵が設えられていたからだ。太宰の遺体が見つかった場所でもあった。脇には小さな無人の小屋があり、ときどき人の出入りがあった。

漂着物の回収作業ならば小屋と同じ土手の上から眺めることができ、私は巨大な洋服箆が流れ着いた現場を見た経験がある。しかし何といっても少年たちが興奮状態になるのは、水死体が引っかかったときだった。少年たちとは、近くの公営福祉施設〈久我山母子ホーム〉で生活している連中である。水死体上がるのは夏に多く、夏休みともなれば、皆はドザエモン見物の日を恐々と待っていた。

ドザエモンが流れてきた場合、小屋に続く小道の黒い門が閉じられるのですぐさま判った。折よく〈ホーム〉に残っていた者たちはそろって押しかけた。母親と少女たちには内緒で、秘密は鉄の結束で守られた。厳密な意味で、果たして運が良いと言えるのかどうか判らないが、私は黒い門が閉まるのに気づくことが多かった。

ある年の梅雨明けの7月、中学1年の私は黒門が厳めしく閉じられているのを見た。警察車両はまだ到着していない。急ぎ〈ホーム〉に知らせに帰ったが、私よりも2学年下のY彦だけがいた。この少年は穏やかな性格だが虚弱な体質で、これまでドザエモン見物に行くことを拒んでいた。ところが初めて私と一緒に行ってみたいと言い出した。

「だいじょうぶか？ 恐くても泣くなよ。見つかったら走って逃げるぞ。いいか？」

「本当は前から見たかったんだ。見つかったら、先に逃げていいからね」

Y彦が母親にドザエモン見物の秘密を打ち明けることは、まず心配はなかった。この少年は幼いときから母親の育児放棄に遭っていた。たまに部屋から言い争う声と物が飛び交う音がすると、隣室の家族たちが止めに入った。母親は病院の食堂に勤めていたが、ひっきりなしに愛人がいて、土曜の夜など帰宅しないことがあった。そうしたときにも、三姉妹のいる隣の家族が食事に呼んだ。

私が高校生兄弟の二人と渋谷の道玄坂を歩いているとき、男と一緒にいるY彦の母親を見かけたことがあった。私たちが後をつけると、連れ立ってホテルに入っていった。翌日、兄弟がその目撃情報をからかう口調でY彦に告げた。

「お前の母ちゃんさ、プロレスラーみたいにでかい男と抱き合っていたぜ」

たちまちY彦の顔が憤怒の形相に変わり、「うそだ、人違いだ」と叫びながら兄弟に殴りかかった。私は緊張で身をこわばらせていると、弟のほうが、「ごめん、ごめん、うそだよ」といってその場はおさまった。

ドザエモンが流れ着いたときには、作業小屋に面した川沿いの道は閉鎖されるので、大きく迂回して南側の土手道から堰堤^{えんてい}に行かなければならない。クヌギ林に入ったとき、Y彦は「まだ遠い？」と弱音をはいた。林を抜けると、川沿いの土手の下に出る。密集したススキをそっと掻き分けながら登った後は、草むらに身を伏せて用心深く匍匐前進を続けた。手足だけでなく腹までも虫刺されで苦しみことになる。今と違って、当時は虫除けスプレーなどない。

草に隠れたまま、土手の腹から恐々と身を乗り出す。好奇心がまさったのか、Y彦は意外にも草の隙間を広げて現場を覗き込もうとする。作業員が三人と警察官二人が立ち合っている。

作業現場から声が聞こえてきた。

「おい、何をやってんだ、そんなんじゃ上げられないぞ」

現場監督らしき男が、若い作業員を叱りとばす。鉄製の熊手のような道具を持った二人が再び試みるが、水死体は流れに押されて回転するばかりだった。

「そいつをだな、もっとホトケさんのお体の下の方に当てがって、こうしてよ、引っ張るんだ」

そう言いながら親方が加勢をすると、遺体は持ち上がった。長いこと水に浸かったのか、膨れ上がった衣服も茶色に変わり、まるで古い俵のように見えた。それでも、長い髪が昆布のように垂れさがっていた。

「女みたいだな」と警察官が言った。Y彦は右手で私の腕を掴んだまま目を凝らしていた。

茶色に膨れ上がった水死体は、ムシロの上に置かれてから簀の子に移され、警察官も手伝って小屋に運び込まれた。しかしすぐに作業員たちが引き返してきて、「あいつらも上げろ」と親方が指示した。羊に似た毛の長い大小の犬の死体が現われた。「親子ですね」と一番若い作業員が言った。二匹の犬もまたムシロにくるまれて小屋に運ばれた。女性の飼っていた犬かもしれないという思いが掠めたが、私はただ息をつめていた。

川の瀬音が戻っている。

帰路、Y彦のすすり泣きが聞こえたが、顔を隠すように先を歩き、途中から走り出した。やはりドザエモンなど見せるべきでなかったと私は後悔した。ショックが後を引くとまずい。〈ホーム〉に帰ったY彦がどこにいるか、おおよそ見当がついた。

案の定、〈ホーム〉の裏手にある物置小屋の脇にうずくまって泣いていた。何かトラブルに遭ったり、失意の出来事に見舞われたとき、Y彦はいつもこの暗がりに身を隠すのであった。

「ごめんな、誘うんじゃなかったよ。溺れ死んだ人間なんか見るもんじゃないからね。やっぱり怖いもんな」

Y彦は首を振った。

「違うよ、そうじゃない」

「何が？」

「違うんだよ」

「だから何が？」

「犬たちだよ」

「犬って、それがどうした？」

「かわいそうだよ。二匹とも落っこちたのかなー、誰か悪いやつが橋の上からすてたのかなー」

Y彦はまた泣き声になった。私はあっけにとられた瞬間、涙があふれてきた。それに同調して、泣き声が追っかけてきた。するとY彦の嗚咽はいっそう大きくなった。子どもなりの認識に過ぎないが、同じ屋根の下で暮らすこの年下の少年のことなど、私はまだ何一つ理解していないと感じた。

翌年の3月、Y彦は静岡の三島にいる父方の伯母に引き取られていった。

夕焼けがおどる

私は石神井池からバス通りを越え、三宝寺池に向かうケヤキ林の細道に入っていった。右手に遊具のそろった児童公園があり、風に舞う落ち葉の中を、幼子たちが歓声をあげていた。

行く手に〈豊島屋〉が見えた。壁板に長年の日向の匂いが滲み込んでいそうな木造の老舗で、「飲物、御食事、豊島屋御休憩所」という看板の文字も薄れている食事処だ。閉店は日没時となっているが、今日は何時までなのか判らない。客はまばらだったが、一息つくことにした。ここでコーヒーという気分でもないので、おでんとお茶を頼んだ。

三宝寺池は都内でも珍しい「国指定文化財・沼沢植物群落」として知られるところで、オオタカ、アオサギ、カワセミが棲息し、豊かな沼沢の植物も群生している。しかしこうした観光案内風の原因から、三宝寺池へやってきたわけではない。ちょうど一カ月ほど前、若い友人のKさんから聞いたこの場所にまつわる遭遇譚が、鮮明な記憶の映像となって残っていたからだ。

〈豊島屋〉の小上がりのテーブル席で休んでいると、この古い建物自体が話の一部始終を覚えているかのように、あたりの空気がかすかに鳴りわたり、くぐもった声が聞こえてきた。

——シャッターを押した瞬間に被写体は過去のものになって、たちまち懐かしい失われた対象になります。ですから、いつだって写真は亡霊を生み出しているのかもしれない。

このことと重なるかどうか判らないのですが、感動とは心のひりひりした切ない喪失感だと思ふことがあります。必ずしも喜びにあふれた気分ではなく、むしろ満たされることのない心の渇きのようなものだ、と。何か慰め難い、痛みや疼きに近いような感覚なのです。ええ、まったく劇的なことじゃなくて、実に些細な話ですが……。三宝寺池のそばに〈豊島屋〉という古びた食事処がありますね。ある日曜日、そこの小上がりのテーブル席で私は蕎麦を食べていました。奥の方に、5、6歳の男の子と還暦をやや越えたくらいの男が食事をしていて、二人のやりとりが聞こえてきたのです。

「どうだ、うまいか？」

「うん、大きいチャーシューも入っているよ。じっじも食べる？」

「いや、じっじは、おでんだけでいいんだ」

「おでん、好きなの？」

「大好きだよ」

「ねえ、おかあさんも、おとうさんも、おでん、好きな人だった？」

「うん、好きだったよ」

「ラーメンは？」

「ああ、大好きだったよ」

二人の過去にどのような家族のドラマがあったのか、私は気分のざわめきを覚えながら池を一周しました。帰り際、祖父と孫の男の子をまた見かけたのです。清流を囲む木道の脇で、カメラを据えてカワセミの到来を待ち構えている人たちにまじって、静かに水面を見つめています。祖父の男は、力仕事をする人なのか地下足袋をはいていました。私がそっと通り過ぎるとき、「じっじ」は男の子を水面がよく見えるように高々と抱き上げました。その何気ない動きに胸をつかれたのです。抱きしめ方に孫への特別な愛しさがこもっているように感じられたからでした。でも、そのときだけの束の間の感情に過ぎません。

それでも、幼い男の子を抱きしめた祖父の姿が、カメラにおさめた鮮明な映像のように脳裡に残っていました。そして表通りに向かう橋を渡ったとき、どこからか金木犀^{きんもくせい}の香りが流れてきました。すると、そのときになって初めて、二人への思いがあふれ出し、感動に心揺さぶられたのです。なぜ後から感じたのか、その時差の意味は判りませんが、早くも祖父と男の子の姿を懐かしんでいて、ひりひりした切なさが身をひたしていたのです。

三宝寺池をめぐる木道を歩き出してから、Kさんの声は甦ってきた。いや、本当は誰の声だったのか。

眺めのよい池の東側^{みぎわ}の汀にそった湧水地で足を止めた。水面が黄昏色に染まり、風が渡ると広く照り映えているように見えた。

背後から声が近づいてきた。

「じっじ、ほら、ほら、夕焼けがおどっているみたいだよ」

「そうか。まわりに木があるだろう、メタセコイアって言うんだけどね、その黄色い枯葉が池に広がっているんだ」

「じゃ、メタセコイアは、夕焼けが好きなんだね」

そう、きっとそうだよ、と私は心の中で呟きながら振り向いた。だが、声の主たちの姿はなかった。

付記——すでにご承知のとおり、『コメット通信』は次号から装いが新たになるという。したがって本連載も今号で終了である。ただ、あえておしまい感は出さなかった。第1回で予告したように、訪れるべき場所は多数残っているが、今後どうするかは未定である。連載という形式に伴って想念(連想)が動く試みなので、方途を思案しなければならない。本連載を含め、『コメット通信』はこれまで多くの拙文の掲載の機会を与えてくれた。心より感謝申し上げたい。長きにわたり伴走していただき、ありがとうございました。

執筆者について——

中村邦生（なかむらくにょ） 1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説には、『チェーホフの夜』（2009年）、『転落譚』（2011年）、『幽明譚』、『ブラック・ノート抄』（いずれも2022年）、『変声譚』（2024年）などが、批評には、『未完の小島信夫』（共著、2009年）がある。